

# 中学生の友人関係スタイルと怒り表出との関連

沓名 翔子<sup>1)</sup>, 中島 綾香<sup>2)</sup>, 五十嵐 哲也<sup>3)</sup>

【要旨】中学生の怒り表出が、その友人関係スタイルによってどのように異なるのかを明らかにした。友人関係スタイルは「同調性」「心理的距離」の観点から、怒り表出は「言語的表出」「非言語的表出」の観点から、検討を加えた。その結果、同調性が高く心理的距離が近い者は、怒りを言葉で適切に表現したいと思いつつも、話し合いによる解決は難しいと感じるなどの理由から、実際にはその場から離れるといった非言語的な表出を行っていると考えられた。また、特に同調性のみが怒り表出に関与していることから、その点に介入を試みることによって、怒り表出の支援が可能になると示唆される。

キーワード：怒り表出 友人関係スタイル 中学生

## I. 問題と目的

近年、深刻な社会問題のひとつとして、青少年犯罪の凶悪化と低年齢化が指摘されている。また「キレル」という言葉が一般的に用いられているように、突発的・衝動的な怒りの表出が学校教育の中で問題となっている（宮下・大野, 2002）。一般に、青年期にあたる中学生は、他の発達段階に比べて怒り感情が生じやすい時期と考えられている（藤井, 2010）。大瀨・小倉（1984）によると、青少年の半数以上が1週間に1～2回怒りを経験し、怒りを感じた人のほとんどすべてが攻撃衝動を感じているという。加えて、そのうちの7割以上の者が実際に何らかの攻撃行動を起こしているとも指摘されている。

このような怒りの表出対象は、青年期において、家族や教師に比べ友人に向かいやすいとも言われる（中村・前田, 2003）。学校ストレス研究においても、中学生にとって最も大きなストレスとなるのは、「友」である（右高, 2009）と指摘されている。中学生では、「重要な他者」の対象が友人関係へと拡大し、友人との結びつきがより強くなる時期である（中井・庄司, 2008）。このことを踏まえると、中学生にとって発達の重要なはずの友人関係が、怒りを引き起こす原因

となったり、怒り感情の適切な表出を阻むものになり得ることが考えられる。これらのことから、中学生の怒りの表出方法について友人関係から見直す必要があると考える。

青年期の交友関係においては、集団的なつきあいや仲間集団への同調性が重視されている（上野・上瀬・松井・福富, 1994）。いじめの研究においても、その背後には集団に同調しない者に対する否定的な態度や、大勢の他者に対する同調傾性が潜んでいるとされる（竹村・高木, 1988）。そこで青年期の友人関係では、仲間はずれにならないために、とにかく一緒に行動し、遅れたり外れたりしないようにする消極的な同調行動傾向が重要である（上野・上瀬・松井・福富, 1994）と指摘されている。また、中学生女子の友人関係は特に緊密性が強く、閉鎖的であるので、1度でも仲間のグループから外れた場合に、そのグループへと戻ることが難しくなる（塚本・濱口, 2003）とも言われる。これらのことから、友人に同調したり、合わせたりすることは必ずしも否定的なことではなく、友人とうまくやっていくための必要不可欠なスキルである（廣實, 2003）とも指摘されている。

ところで、一般に、同調性が高いことは仲間集団への密着性を示すものと考えられることができる。これに類似した概念として、心理的距離というものがある。この心理的距離は、自己がある他者との間でどれほど強く心理的な面でのつながりをもっていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係をもっていると感じているかの度合い（金子, 1989）と定義されている。現代青年に

2011年12月12日受理

<sup>1)</sup> 碧南市立新川小学校

<sup>2)</sup> 愛知県立昭和高等学校

<sup>3)</sup> 養護教育講座

においては、心理的距離が大きい、すなわち心理的な密接性が低いということが指摘されている（上野・上瀬・松井・福富，1994）。一方で、自律性が高いことが、友人との心理的距離を大きくしている可能性を考えれば、友人と心理的距離を置くことが発達の望ましい面を有しているとも考えられる（上野・上瀬・松井・福富，1994）。

以上のような友人関係の諸側面をめぐる課題を整理して、上野・上瀬・松井・福富（1994）は、心理的距離が内面の密接さを意味し、同調性が外面的な行為を意味していると述べた上で、「現代青年においては、友人と内面的には心理的距離をとりたいと考えながら、行動的には同調的であろうとする青年が存在している」と指摘している。このことから、内面的な密接さと外面的な行為とを区別する必要性が指摘できる。すなわち、外面的には一緒に行動し、うまくいっているように見える友人関係でも、一緒にいることに重点が置かれ、内面的には満足感や安心感などを得ることができていないことも推察される（榎本，1999）。

このように考えると、たとえば怒りという感情が生じた場合、本当に満足できる関係であればそれを素直に表出できるかもしれない。また、本当に仲が良くない場合には、その関係性を維持する必要がないため、素直に怒りを顕にできるであろう。しかし、本当は満足していないのに表面的に仲良くしなければいけない関係であれば、怒りの表出には極めて困難を伴うと推測される。このように、友人関係においてネガティブ感情を表現しないことは、その場ではうまくやっているように思えても、本当に理解し合っているという充実感や満足感が得られない（崔・新井，1998）という指摘もある。ところが、この点に関して、内面的な密接さと外面的な行為とを区別して検討した研究は見当たらない。

以上の点から、本研究では、同調性と心理的距離から捉える友人関係スタイル別に、中学生の友人場面における様々な怒り感情の表出方法への影響を検討することを目的とする。このことは、感情をコントロールできない中学生の増加が指摘される昨今、学校現場における支援を検討する上で意義ある知見が得られると考える。

## Ⅱ. 予備調査

### 1. 方法

#### (1) 調査対象

中学校教諭 4 名（男性 1 名・女性 3 名、平均年齢 30.75 歳、平均経験年数 4.25 年）を対象とした。

### (2) 調査内容

大学生向けに作成された友人に対する怒り表出尺度（浦井・山本，2009）の質問項目が、中学生の怒りの表出行動を測定するものとしてふさわしいか否かを判断してもらった。各項目について、「A：このままの項目でよい」「B：改善した上で項目にすべき」「C：中学生に適切でない」のいずれかであるのか判断を求めた。なお、「B：改善した上で項目にすべき」と判断した場合には、中学生に適した文章への変更を求めた。

### (3) 調査時期と手続き

2010 年 7 月に配布し、自宅に持ち帰り後に回答してもらった。

## 2. 結果

大学生向けに作成された友人に対する怒り表出尺度（浦井・山本，2009）の 16 項目のうち、75%以上が「A」と判断した 12 項目をそのまま採用し、50%以上が「B」または「C」と答えた 4 項目について検討した。検討の結果、「冷静に」という表現は「落ち着いて」、「言動」という表現は「言葉や行動」に修正し、「事情を聞く」「関わりを避ける」については、それぞれ「理由を聞く」「関わらないようにする」といった表現に修正した。

## Ⅲ. 本調査

### 1. 方法

#### (1) 調査対象

A 県内の公立中学校 1～3 年生、417 名（男子 207 名、女子 210 名）を調査対象とした。そのうち、有効回答者は 287 名（71.9%）であった。なお、有効回答者の学年・性別の内訳は、1 年生 86 名（男子 32 名、女子 54 名）、2 年生 103 名（男子 52 名、女子 51 名）、3 年生 98 名（男子 43 名、女子 55 名）であり、合計 287 名（男子 127 名、女子 160 名）であった。

#### (2) 調査内容

フェイスシートで性別、学年、友人の有無を尋ねた。友人がいる場合には、その友人との関係性を、親友・ふつうの友だち・その他（その他の場合にはその関係を具体的に記述するよう求めた）の中から選択してもらった。その後、以下 a～d を尋ねた。

#### a. 同調性尺度

石本・久川・齋藤・上長・則定・日潟・森口（2009）の同調性尺度を使用した。本尺度は、一因子構造であり、合計 10 項目からなる。回答形式は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまら

ない」「あてはまらない」の4段階評定であり、傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。

#### b. 心理的距離尺度

天貝（1996）の心理的距離尺度を使用した。回答形式は、紙に9.5 cmの線分を示し、「あなたが一番左端の○のところにいます。友だちはあなたの気持ちからどのくらいの距離にいますか。印をつけてください」という教示によって、心理的距離を示すよう求めた。

#### c. 怒り表出尺度

浦井・山本（2009）の友人に対する怒りの表出行動尺度について、予備調査の結果を踏まえて表現修正を行ったものを使用した。本尺度は「言語的表出」「非言語的表出」の2つの因子によって構成されており、合計16の項目からなる。回答形式は、各項目について対象者がそれぞれの表出行動をどの程度とりたいと思うか（理想）について「非常にとりたい」「とりたい」「あまりとりたくない」「全くとりたくない」の4段階評定であり、各傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。また、実際に対象者がそれぞれの表出行動をどの程度とると思うか（現実）についても尋ね、「非常によくとる」「よくとる」「あまりとらない」「全くとらない」の4段階評定とし、各傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。

#### d. 怒りの外向性尺度

反中（2008）の対人場面別怒り表現尺度のうち、怒り表出に関連すると考えられる「怒りの外向性」を取り上げた。これは、4項目からなる。「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4段階評定であり、各傾向の強い回答から順に得点が高くなるように得点化した。

### （3）調査時期と手続き

2010年9月初旬に、各学級単位で調査用紙が配布され、集団で実施し、回収された。回答は無記名で行われ、本調査が研究のためにのみ使用されることが教示された。

## 2. 結果

### （1）各尺度の分析

同調性尺度について項目分析を行ったところ、1項目の度数分布において偏りが見られた。また、1項目に天井効果が見られた。さらに、信頼性分析において2項目で項目を削除した場合の $\alpha$ 係数が高くなるものがあった。そこで、これらの計4項目を除いた6項目のクロンバックの $\alpha$ 係数を求めたところ、 $\alpha = .75$ ,  $Mean=2.37$ ,  $SD=.56$ を示

した。よって、この6項目を用いることが適切であると考えられたので、各項目得点の総和を項目数で除した値を同調性得点とした。

心理的距離尺度については、天貝（1996）に基づき、「あなた」の○の右端を始点とし、線分の端を終点として計測した。友人の位置が線で示されたものについてはその距離を測り、○で示されたものについては○の中心までの距離を測った。ただし、あなたの○と友人の○が接しているものについてはその距離を0とみなした。得点は、距離をそのまま心理的距離得点とした。なお最小値は0 mm, 最大値は95 mmであった。

怒り表出尺度については、まず項目分析を行った。その結果、3項目の度数分布に偏りが見られた。また、4項目で天井効果もしくは床効果が見られた。さらに、信頼性分析において1項目で項目を削除した場合の $\alpha$ 係数が高くなるものがあった。そこで、これらの6項目を除いた10項目による因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施したところ、2つの因子が抽出された。第1因子は「説明を求める」「理由を聞く」などの項目が含まれた。これは、言葉によって怒りを表しつつ、相手の話も聞いているということを表している。第2因子は「関わらないようにする」「態度で怒りを表す」などの項目が含まれた。これは、表情や態度といった言葉ではない方法で怒りを表していることを示している。そこで、先行研究（浦井・山本, 2009）と同じ分類になったため、それに則って第1因子を怒りの言語的表出因子、第2因子を怒りの非言語的表出因子と命名した（Table 1）。信頼性を検討するためにクロンバックの $\alpha$ 係数を求めたところ、怒りの言語的表出が $\alpha=.83$ 、怒りの非言語的表出が $\alpha=.80$ を示し、十分な内的一貫性が得られた。また、本尺度は予備調査をもとに大学生向けの尺度を中学生向けに修正した。そこで、妥当性を検討するため、「怒りの外向性」尺度（反中, 2008）との間のPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、怒りの言語的表出因子と怒りの外向性の相関係数は $r=.14$  ( $p<.05$ )、怒りの非言語的表出因子と怒りの外向性の相関係数は $r=.33$  ( $p<.001$ )と弱程度ながら有意な相関がみられた。したがって、怒り表出尺度の妥当性は、一定程度保たれていると考えられる。そこで、各因子ごとに各項目得点の総和を項目数で除した値を、各下位尺度得点とした。その記述統計量をTable 2に示す。

### （2）各尺度間の相関

同調性尺度、心理的距離尺度、怒り表出尺度の各下位尺度についてPearsonの積率相関係数を求めた。その結果、同調性尺度と心理的距離尺度と

Table 1. 怒り表出尺度の因子負荷量と因子間相関

	因子負荷量		共通性
	I	II	
因子 I : 怒りの言語的表出 ( $\alpha=.83$ )			
説明を求める	.80	.03	.65
理由を聞く	.77	-.01	.59
話し合う	.72	-.04	.50
相手の間違いを落ち着いて注意する	.70	-.05	.47
相手の言葉や行動の間違いを言う	.54	.11	.34
因子 II : 怒りの非言語的表出 ( $\alpha=.80$ )			
関わらないようにする	-.05	.78	.59
口数を減らす	.02	.76	.59
無視する	-.02	.68	.45
その場から立ち去る	-.02	.64	.40
態度で怒りを表す	.13	.49	.29
因子間相関	.27		

Table 2. 怒り表出尺度の記述統計量

	Mean	(SD)
怒りの言語的表出	2.10	(.72)
怒りの非言語的表出	2.19	(.76)

Table 3. 同調性, 心理的距離と怒り表出との相関

	怒りの言語的表出	怒りの非言語的表出
同調性	.08	.17 **
心理的距離	-.08	-.08

\*\* $p<0.01$

の間では有意な関連が見られなかった ( $r = -.06, n.s.$ )。

怒りの言語的表出は, 同調性尺度および心理的距離尺度の双方と有意な関連が見られなかった。

しかし, 怒りの非言語的表出については, 同調性尺度との間においてのみ, 弱程度ながら有意な相関が認められた (Table 3)。

### (3) 各尺度の性差, 友人関係の質における差

同調性尺度, 心理的距離尺度, 怒り表出行動尺度の各下位尺度の性差について  $t$  検定を行った結果, 同調性, 心理的距離について男女差は見られなかった (同調性:  $t[285]=0.46$ , 心理的距離:  $t[285]= -.19, n.s.$ )。しかし, 怒り表出において女子は男子よりも言語的表出因子の理想得点が高く ( $t[285]= -2.05, p<.05$ ), 非言語的表出因子の現実得点が高いことが示された ( $t[285]= -3.17, p<.01$ )。

また, 友だちとの関係で親友を選んだものは 197 人 (68.6%), ふつうの友だちを選んだものは 95 人 (29.6%), その他は 5 人 (1.7%) であった。こうした友人関係の質によって同調性尺度, 心理的

距離尺度, 怒り表出行動尺度に差が見られるかを検討するために, 友人関係の質を要因とする 1 要因分散分析を実施した。その結果, 心理的距離において有意な差が得られた ( $F[2/284]=30.71, p<.001$ )。そこで, Tukey 法による多重比較を行ったところ, 心理的距離はふつうの友だちよりも親友のほうが近いことが示された。

### (4) 同調性と心理的距離による群分けの設定

次に, 友人関係のスタイルによる怒り表出の違いを見るために, 同調性と心理的距離による友人関係のスタイルを抽出することとした。その分類は以下のとおりである。

まず同調性尺度については, 対象者を高得点群 (以下, H と表記する), 低得点群 (以下, L と表記する) の 2 つの群に分類することとした。心理的距離尺度については, 対象者を遠距離群 (以下, h と表記する), 近距離群 (以下, l と表記する) の 2 つの群に分類することとした。分類基準は, 各尺度の度数分布を参照し, 対象者数が上位・下位 33.3% ずつになるよう分類することとした。

その結果, 同調性尺度では, 尺度得点 2.66 以

Table 4. 同調性と心理的距離の4群による怒り表出の差

	Hh		HI		Lh		LI		F値	多重比較
	(n=22)		(n=33)		(n=35)		(n=40)			
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)		
怒りの言語的表出 (現実)	2.02	(.63)	2.22	(.70)	1.95	(.74)	2.01	(.88)	2.09	
怒りの言語的表出 (理想)	2.41	(.76)	2.67	(.80)	2.17	(.74)	2.29	(1.00)	3.30 *	HI群>Lh群
怒りの非言語的表出 (現実)	2.22	(.71)	2.48	(.89)	2.09	(.66)	1.93	(.88)	1.03 †	HI群>LI群
怒りの非言語的表出 (理想)	2.03	(.71)	2.09	(1.08)	1.92	(.62)	1.95	(.92)	.19	

†p<.10 \*p<.05

Table 5. 同調性高低群による怒り表出の差

	L群		H群		t値
	(n=82)		(n=102)		
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	
怒りの言語的表出 (現実)	1.99	(.77)	2.11	(.65)	- 1.18
怒りの言語的表出 (理想)	2.28	(.86)	2.52	(.75)	- 2.02 *
怒りの非言語的表出 (現実)	2.04	(.75)	2.33	(.74)	- 2.57 *
怒りの非言語的表出 (理想)	1.91	(.80)	2.07	(.82)	- 1.27

\*p<.05

Table 6. 心理的距離高低群による怒り表出の差

	l 群		h 群		t値
	(n=96)		(n=101)		
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	
怒りの言語的表出 (現実)	2.17	(.82)	2.03	(.67)	1.34
怒りの言語的表出 (理想)	2.51	(.91)	2.35	(.72)	1.33
怒りの非言語的表出 (現実)	2.26	(.90)	2.19	(.68)	.64
怒りの非言語的表出 (理想)	2.09	(.98)	2.00	(.65)	.74

上をH, 2.00以下をLとした。心理的距離尺度では、尺度得点18.00以下をl, 38.00以上をhとした。

次に、以上の分類によって得られた結果を組み合わせ、4分類(Hh/ HI/ Lh/ LI; いずれも同調性尺度の分類を先に表記している。以下、同様の表記を行う)を抽出し、この4つの群を設定した。

(5) 同調性と心理的距離の組み合わせによる群分けと怒り表出との関連 (Table 4)

同調性と心理的距離を組み合わせた以上の4群によって、怒り表現の各下位尺度得点に差が見られるかを検討するため、群分けを要因とする1要因分散分析を行った。

その結果、怒りの言語的表出において有意な結果が得られた。そこで、Tukey法による多重比較を行ったところ、怒りの言語的表出の理想得点でLh群よりもHI群のほうが高いことが示された。

怒りの非言語的表出においても有意傾向が認められた。そこで、Tukey法による多重比較を行ったところ、怒りの非言語的表出の現実得点でLI

群よりもHI群のほうが高いことが示された。

怒りの言語的表出の現実得点、怒りの非言語的表出の理想得点においては有意な結果は得られなかった。

(6) 同調性、心理的距離それぞれと怒り表出との関連

同調性と心理的距離の組み合わせによる分析において、有意な結果が得られない側面があった。また、同調性と心理的距離のいずれの方が、より怒り表出に関連しているのかを検討する必要もある。そこで、同調性、心理的距離それぞれの高低群によって怒り表出に差があるかを検討するため、t検定を行った。

その結果、同調性の高低群 (Table 5) では、怒りの言語的表出において、理想得点でL群よりもH群のほうが高いことが示された。しかし、現実得点においては有意な結果が得られなかった。また、怒りの非言語的表出の現実得点ではl群よりもh群のほうが高いことが示された。しかし、理想得点については有意な結果が得られな

かった。

心理的距離の高低群 (Table 6) ではいずれも有意な結果が得られなかった。

## IV. 考察

### 1. 性差および友人の質による差について

#### (1) 怒り表出

怒り表出の性差に関して、男子より女子のほうが、言語的な方法によって怒りの表出を行いたいと思っているという結果が得られた。また、実際は男子より女子のほうが非言語的な方法で怒りを表しているという結果が得られた。

今回使用した尺度の非言語的表出因子の内容は、「無視する」「その場から立ち去る」など、問題となる状況から離れることによって解決しようという内容である。これは、言語化への不安とともに、自分の言ったことや言い方によって相手とぎくしゃくしてしまうことを避けようとするところから、生まれる行動ではないだろうか。塚本・濱口 (2003) によれば、女子は特定の集団を形成し、その集団で行動を共にすること、また中学生女子の友人関係は特に緊密性が強く、閉鎖的であるので、一度でも仲間のグループから外れた場合、そのグループに戻ることに難しくなることを指摘している。また、友人とは親密な関係を保ちつつ、しかも拒否されたくないとの思いは中学生男子よりも中学生女子のほうが強い (今川, 2009)。つまり、女子は関係をよく保つために相手と話し合ったうえで問題を解決したいと考えながらも、自分の気持ちを適切に伝える方法がわからないため、その場を離れるなどの消極的な方法を取っているものと考えられる。

それに対して、中学生男子は、お互いの内面まで開示し合った上で理解し合うような友人関係が、まだ重要でない (吉岡, 2001)。このことから、男子は話し合いをして互いにわかり合いたいと思う気持ちが女子ほど強くないのであろうと推察される。

なお、友人の質による差については、有意な結果は得られなかった。友人との親密度の違いにより怒りを表出する度合いがどう変わるかについては、浦井・山本 (2009) の研究で検討が求められていた。そこで、その指摘を踏まえて本研究で検討したものの、差が見られなかった。したがって、友人との親密度は怒り表出の変動要因としては考えにくいと示唆される。

#### (2) 同調性

同調性については、性差が見られなかった。女子は男子に比べて、つきあう相手を限定し選択す

るようなつきあい方をしていない (落合・佐藤, 1996) ために、考えや価値観の異なる者とも良好な関係を築くためのスキルとして、同調的な態度を示していると考えられる。一方、男子は自分に自信をもち、友達と自分は異なる存在であるという認識をもって友達つきあいをしている (落合・佐藤, 1996)。しかし、杉浦 (2000) の研究で、中学生男子で一緒に行動するグループをもっていないのは、被験者 187 名中 4 名と非常に少なかったという結果から、男子も集団生活を行う比重が大きいと考えられる。したがって、男女いずれであっても同調的な行動は求められており、しかしその背景となる心的要因は異なるのだと推測される。この点に関し、今後の詳細な検討が望まれる。

こうした傾向は、友人の質によらないことも確認された。親友やクラスメイトなど、どの関係性においても一定の同調性が求められていると言える。

#### (3) 心理的距離

天貝 (1996) の研究では、中・高校生において、男子よりも女子のほうが距離が近いことが示されている。また、坂本・高橋 (2009) の大学生を対象とした研究でも、同様の結果が得られている。

しかし、本研究では性差は見られなかった。本研究のように、中学生のみに限定した心理的距離の研究はなく、その性差に関する発達の変化も明らかとはなっていない。さらに、本研究では同性の友人であるか否かは特定していない。今後、このような複数の視点を併せて検討することが求められよう。

また、友人関係の質による差については、「ふつうの友だち」よりも「親友」のほうが近いという結果が得られた。天貝 (1996) において、中・高校生は普通の友人より最も親しい友人と心理的距離が近いことが示されている。本研究の結果もこれに一致した。互いの関係が進むにつれ、両者間の心理的距離は限りなく親密さの極に近づく (天貝, 1996) ということからわかるように、親友に対する信頼感は心理的距離を短縮させるように働いていることがわかる。

このことから、友人関係の質は心理的距離には影響するが、同調性の高さには影響が見られなかった。相手と親密な関係を築けているかどうかを判断する基準は、外面的な行動ではなく、内面的なつながりであると考えられる。

### 2. 同調性と心理的距離の組み合わせによる群分けと怒り表出との関連

#### (1) 怒りの言語的表出

理想得点において、Lh 群より HI 群のほうが高

いという結果が得られた。しかし、現実得点においては有意な結果が得られなかった。

同調性が高く、心理的距離が近い群の理想得点が高いことに関して、「友人に対する親和傾向の高い者は、仲間として自分同様に親密な関係を大事にする者を選ぶかもしれない」（塚本・濱口，2003）との指摘がある。また、他者から自己開示をされると自分を信頼しているのだと感じること、自己開示を受けた場合、その人も相手に自己開示を返し、相手への信頼感を高めていく傾向があること（土田，2001）が知られている。さらに、怒りの表出においては友人と深くかかわろうとする傾向が高いほど、怒りを主張的に表出する傾向が高いことが示されている（木野，2004）。本研究では親和傾向について測定は行っていないが、親密な関係においては、この相互の信頼感がより深くかかわろうとする気持ちにつながり、相手との話し合いによって問題を解決したいと思う結果になったのではないかと考えられる。

ところが、実際の表出において差は見られない。浦井・山本（2009）によれば、友人と二人きりの時には自分のとりたい表出行動がとれるとされている。しかし、本研究ではほとんどの対象者が親友を思い浮かべていたものの、浦井・山本（2009）の結果を支持する結果は得られなかった。その理由として、まわりに人がいるかなどの情報を設定しなかったことが挙げられる。浦井・山本（2009）の研究から、公的場面か私的場面か（友人と2人きりか、他の人がいるか）によってどの程度怒りを表出するかが変わってくるのが考えられる。心の中では相手に怒りを表したり、説明を求めたいと思っても、まわりに人がいることで自分がどう思われるか気になり、表出を抑制する者もいるということである。このことにより、対象者の中で思い浮かべられた場面が統一されず、とりた行動や実際にとる行動の得点にばらつきが出たものと考えられる。今後は、私的場面と公的場面での違いについても検討が求められるだろう。

また、本研究で用いた心理的距離尺度は自分が相手をどう見ているかというものであり、相手にどう思われているかという面が測定できていない。相手との関係に不安を抱えて怒りの表出ができない場合も考えられるので、相手にどう思われているかという観点も取り入れた尺度で怒りを現実に表出できない背景を検討する必要がある。

### （2）怒りの非言語的表出

現実得点において、LI群よりHI群のほうが高いという結果が得られた。しかし、理想得点においては有意な結果が得られなかった。

これは、心理的距離が近い人の中で、同調性が

低い人より高い人のほうが回避的な行動をとっているということである。木村・入谷・下村・山本・小幡（2001）の研究で「友人は自分のことを信頼してくれている」と回答した者が多い一方で、「本当は嫌でも友人の言うことに従ってしまう」という矛盾した回答をした者の割合も高かった。また、石本・久川・斉藤・上長・則定・日潟・森口（2009）の研究において、心理的距離が近い人の中で、同調性が低い人より高い人のほうが対人緊張、被評価意識が高いことが示されている。これは、同調性が高い者は、相手や周りの者にどう思われるかを強く意識してしまうことを示している。このことから、友だちを信頼しつつも、相手にどう思われるかという不安によって、相手と話し合うなどの解決方法がとれないのではないかと考えられる。

## 3. 同調性と怒り表出との関連

### （1）怒りの言語的表出

理想得点において、同調性が低い者よりも高い者の方が言語的表出を行いたいと思っているという結果が得られた。親密な相手に対しては、ある程度自分の気持ちを表現しようとしていると考えられる。しかし、現実得点において差は見られなかったことから、実際に表出するには至っていないこともわかる。

大淵・小倉（1984）によると、内面的には相手と話し合うなどして建設的な問題解決を目指したいものの、一つ間違えば相手に不快感を与えてしまう危険もあり、実際には実行に至らないことが多いとされる。このことは、本研究における同調性が高い者の特徴と類似している。したがって、同調性が高い者ほど、話し合うなどの建設的な問題解決を望みながら、適切な表現方法で相手に不快感を与えることなく関係維持が行えるかという不安があるため、実際には実行に移せない傾向があると考えられる。

### （2）怒りの非言語的表出

現実得点で、同調性が低い者より高い者のほうが、非言語的表出を多く行うという結果が得られた。

木村・入谷・下村・山本・小幡（2001）の研究では、「悪口を言われた原因が何であるかを突き止めようとする」と回答した割合は男女とも60%程度となっているものの、実際にその行動をとった割合は20～30%と低い。これらの人が実際どのような対処行動をとったかという点、「思考回避」や「あきらめ」といった行動である。これは、「人に合わせたい」と思えば思うほど、話し合いで解決することが難しいと感じたためである

と考えられる。本研究においても、言葉による話し合いで相手とわかりあいたいと思いつつも、実際にはその場を去るなどの非言語的な行動をとっているということが示された。よって、先行研究と同様のことが示唆されたと言える。

#### 4. 心理的距離と怒り表出との関連

##### (1) 怒りの言語的表出

現実、理想得点とも、有意な結果は得られなかった。

先行研究では、友人と深くかかわろうとする傾向が高いほど怒りを主張的に表出する傾向が高い(木野, 2004)という。一方、親密性の低い相手に対しては、関係の深まりを求めないため、話し合うことをしないと考えられる。しかし、本研究で両者の間に差は見られなかった。これは、杉浦(2000)によると、中学生では拒否不安と親和傾向とが未分化であり、親しい関係を維持したいと思うと、必然的に拒否不安も高くなってしまいうためであると考えられる。このような状況があれば、理想としても「どのようにすればよいかわからない」感覚が生じ、心理的距離よりも他の要因によって結果が左右されたのではないかと考えられる。

##### (2) 怒りの非言語的表出

この点についても、現実、理想得点ともに有意な結果は得られなかった。

親密である場合、互いのコミュニケーションスタイルに慣れており、相手の感情などをスムーズに把握できることは確かなようである(大坊, 1998)。このため、表情などから相手に怒りが伝わるのを避けようと、その場から離れるなどの方法をとると考えられる。また、親密でない場合には、関係を維持する必要がないため、修復するための努力をしないのではないかと。したがって、両者の間に差が見られなかったと考えられる。

#### 5. 同調性・心理的距離と怒り表出との関連についての総合的考察と今後の課題

以上を踏まえて、同調性と心理的距離が怒り表出に及ぼす影響について、総合的に考察する。

怒り表出に関して、同調性が高く心理的距離が近い者は、怒りを言葉によって適切に表現したいと思いつつも、話し合いによる解決は難しいと感じるなどの理由から、実際にはその場から離れるといった非言語的な表出を行っていると考えられる。

また、同調性と心理的距離を分けて分析しても、同調性のみが怒り表出に関与しており、組み合わせによる分析と同様の結果が得られた。したがっ

て、中学生においては同調行動によって外的にうまくいっているかどうかということが、友だちとの関係をとらえる重要な要因となっていると考えられる。このことから、学校教育においては、友人関係における同調的な行動に着目し、その点に介入を試みることによって、怒り表出の支援が可能になるとも示唆される。

しかし、本研究には、いくつかの検討課題が残されている。1つめは、中学生を調査対象としたことによって、心理的距離と男女差の分析結果の解釈に限界が見られたことである。心理的距離の発達の側面については、調査対象の年齢を拡大し、より詳細な検討を行うことが必要であろう。2つめは、怒り表出の方法が限られていることである。本研究で用いた怒り表出行動尺度は、言語的表出と非言語的表出という2つの側面しか測定できていない。しかし、第三者への表出や物理的攻撃といった他の表出方法も考えられることから、怒り表出を多面的にとらえた上で検討することが望まれる。3つめは、同調性尺度の内容である。友人と一緒にいることが楽しいために同調するのと、仲間外れになるのを避けるために同調するのは異なると考えられる。今後は、どのような理由で同調しているかを区別してとらえる必要があると考えられる。

#### 引用文献

- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29(2), 130-134.
- 崔京姫・新井邦二郎 1998 ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46(4), 432-441.
- 大坊郁夫 1998 しぐさのコミュニケーション人は親しみをどう伝えあうか セレクション社会心理学 14 サイエンス社
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化 教育心理学研究, 47(2), 180-190.
- 藤井義久 2010 怒りの感情の発達 心理学評論, 53(1), 93-104.
- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 2005 中学生における怒り表出行動とその抑制要因 心理学研究, 76(5), 417-425.
- 廣實優子 2003 現代青年の交友関係から見た自己受容性と社会的スキル 広島大学大学院教育学研究科紀要, 52, 305-310.
- 今川峰子 2009 交友関係のタイプを診断するテスト開発の試み 一会話時のパーソナル・ス



- ペースと感情の測定を利用して— 現代教育学部紀要, 1, 105-117.
- 石本雄真・久川真帆・齋藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 2009 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応感及び学校適応との関連 発達心理学研究, 20(2), 125-133.
- 金子俊子 1989 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 木村龍雄・入谷仁士・下村美佳子・山本和代・小幡セイ 2001 学校ストレスと心身の健康との関連について 大阪教育大学紀要, 50(1), 157-173.
- 木野和代 2004 怒り反応傾向と精神的健康および個人内要因との関連 名古屋大学大学院教育発達学研究所紀要, 51, 197-205.
- 右高和生 2009 児童・生徒の学校と家庭における生活とストレス—市内小学生と中学生の実態調査の結果から— 現代教育学部紀要, 1, 179-189.
- 宮下一博・大野久 2002 キレル青少年の心 北大路書房
- 中井大介・庄司一子 2008 中学生の教師に対する信頼感と他者との心理的距離との関連 筑波教育学研究, 6, 21-34.
- 中村多見・前田健一 2003 大学生の怒り経験と怒り対処方法 広島大学心理学研究, 3, 147-155.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44 (1), 55-65.
- 大淵憲一・小倉左知男 1984 怒りの経験(1): Averillの質問紙による成人と大学生の調査概要 犯罪心理学研究, 22(1), 15-35.
- 坂本安・高橋靖恵 2009 友人関係における心理的距離のズレと疎外感の関連 青年心理学研究, 21, 69-81.
- 上中亜弓 2008 中学生における対人場面別怒り表現尺度作成の試み 感情心理学研究, 15(1), 13-23.
- 杉浦健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係 教育心理学研究, 48(3), 352-360.
- 竹村和久・高木修 1988 “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究, 36(1), 57-62.
- 土田昭司 2001 対人行動の社会心理学 人と人との間のこころと行動 シリーズ 21世紀の社会心理学 1 北大路書房
- 塚本貴文・濱口佳和 2003 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響—中学生の場合— 筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 45-55.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42(1), 21-28.
- 浦井彩・山本眞利子 2009 場面の違いにおける友人に対する怒りの表出行動のズレと精神的健康および満足感に関する研究 久留米大学心理学研究, 8, 85-93.
- 吉岡和子 2001 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.

## 謝辞

本研究は、第一筆者と第二筆者が共同研究を行い、第三筆者が指導した平成22年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に快くご協力いただきました中学生の皆様、ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。